

「子どもの学びを育てる評価」

金沢大学大学院 教育学研究科

学校教育専攻

北嶋 邦英

問題の所在

日本における教育評価の歴史を遡ると、戦前の絶対評価は、教員の主観的・恣意的な判断が入り込みやすく、科学的・客観性の高いとはいえない評価であった。その反省から、戦後はアメリカから相対評価の技法が輸入され、科学的・客観的な評価として広まっていた。

ところが、高度経済成長に伴う学歴獲得競争が日本列島を席卷するようになると、「相対評価」は、教育評価とは何よりも子どもたちの値踏み行為であるというとらえ方を蔓延させることになった。さらに、排他的な競争を常態化させ、「受験学力」という問題が顕在化してきた。

目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）は、相対評価の弊害を克服する評価方法として、また、すべての子どもに必要な学力を身につけるといふ学力保障論の立場にたち、どのような学力が形成されたかを明らかにできるような評価として期待された。

しかし一方では、教員に対して「すべての子どもに必要な学力を身につける」という重い責任を課せられることとなった。また、評価の実務に関する現実的な諸課題が顕在化してきた。

本論文では、教育評価の意義を問い直すとともに、「目標に準拠した評価（いわゆる絶対

評価）」をどうとらえるのか、現実的な諸課題をどう克服していくのか、どのように指導と評価の一体化を図り、評価を通して子どもの学びをどう育てていくのかについて明らかにすることを目的とした。

評価の機能と評価観

2002年度からはじまった新しい評価は、相対評価の弊害を克服することを目的としたわけだが、この評価が登場してきた背景として、産業界における生産・販売システムや人事・評価システムの急激な変化という社会的状況と、個性尊重の考え方や、教育機会の多様化と量的拡大、教育機関への複数所属と生涯学習社会などの教育的状況が大きく影響しているのである。

このような状況の中で求められている教育評価の機能と役割は、教育目標を実現するための教育の実践に役立つようにすることであり、子ども一人一人のよさや可能性を積極的に評価し、豊かな自己実現に役立つようにすることである。つまり、子ども一人一人の到達度を評価するとともに、その子どもの実状に応じた指導がどうであったかという教員自身に対する評価でもある。それゆえ、教員は、子どもをより正確に見とる力量と子ども一人一人に対応した指導の力量とを身に付ける必要に迫られてきている。

そこで、「目標に準拠した評価」および「個

人内評価」がこれまで以上にいっそう重視されることとなったのである。

目標に準拠した評価(いわゆる絶対評価)

目標に準拠した評価を進める上でまず必要なのが、指導目標をこれまで以上に明確にすることと、各教科の4観点に即した評価規準を設定することである。

目標に準拠した評価の課題

次に、実際にこの評価方法を実践し、その中から問題点を明らかにし、改善の方策を立てることである。

「関心・意欲・態度」の評価の問題については、それを綿密に評価する以上に、育成するという視点を重視し、個人内評価によって、一人一人の学びの向上を図ることが大切である。

評価規準・評価基準の作成と活用に関わる問題については、客観性や信頼性を考えると、評価規準の共同作成と資料の共有化が必要である。

評価規準を活用しながら評価を進めるためには、評価が自己目的化しないことと、評価すべき子どもの思考・活動をイメージ化すること、評価項目を絞り短時間で評価することによって継続可能な評価とすることが求められる。

学びを育てる評価

評価を最大限、教員の指導に役立たせるためには「指導と評価の一体化」が必要がある。これは、「フィードバックとしての評価」だけでなく、授業の中で「指導としての評価」も展開していかなければならない。

このような授業を行うためには、指導目標を明確にすること、評価のポイントを絞るこ

と、めあてと評価を子どもに示すこと、瞬時に一人一人評価することが重要である。

しかし、評価を行う主体が常に学校と教員の側、つまり子どもの外側にあることにより、両者の評価に対する意識にはズレが生じ、子どもは評価を主体的に受け止めることができなくなる。教員は、子どもを評価する対象として見るだけでなく、子ども自身も評価の主体であると考えることが重要である。教員と子どもが対話を通して、学習の「ねがい」や「ねらい」を共有するとともに、教員は「評価」をも共有する手だてを講じていくことが、子どもの豊かで確実な学びにつながると考える。

今後の課題

子どもも評価の主体と考え、「ねらい」や「評価」をも共有することの具体的な方法論については未だ確立されておらず、今後の研究課題である。

また、評価には、意図的、組織的とはいえない、人々の生活の中に自ずと組み込まれたレベルの評価もある。教室での授業においても、子どもと教員の間に交わされるコミュニケーションの中に、数値的な評価以前の素朴な評価が働いていて、それが重要な役割を果たしている。

評価は一種の対話(コミュニケーション)であり、どのような評価としての対話が行われるかによって、学習者としての意識の内容が変わってくる。そのメカニズムを解明することも今後の課題の一つである。